

みなと元町

タウンニュース

No.
313

発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

モチカ計画から栄町通、ハーバーロードへと根付いていったまちづくり 阪神淡路大震災直後、関会長 まちづくりの記憶と記録



平成14年9月4日、住民主体のまちづくりを推進、地域の発展に寄与したとして、矢田立郎神戸市長から功労賞を贈られる関一雄さん

平成30年6月25日、弊協議会の関一雄・前会長が逝去されました。会長職を引き継いだ者として、関・前会長の多難な足跡を紹介させていただきたいと思います。

会長に就任されたのは、阪神淡路大震災の傷跡も生々しい平成7年7月でした。就任あいさつで「人間も未熟、非才、アマチュアの域をでない人間でございますが、アマチュアはアマチュアなりに肩肘張らず、気負わず、謙虚な気持ちで重責を担ってまいりたい」と、まちづくりにのぞむ覚悟を披露されています。

初仕事は、長年、穴門筋で営業してきた幸福銀行の撤退後、新しいビル建設を機に、JR元町駅と将来開通する地下鉄海岸線元町駅(仮称)を地下で結ぶ「モチカ」構想でした。関会長自身経営の店舗を含む再開業事業です。新しいビル建設事業者に対し、近隣店舗の代表として折衝を重ねられましたが、店舗面積の縮小、営業環境の変化などから合意に至らず、進展のないまま終息します。利害が幾重にも交錯する中で、肩肘張らない関会長の姿勢が、円満な収束への道を導いたにちがひありません。

一方、甚大な被害を受けた40%にのぼる協議会のまちづくり地域については、関会長が会員から幅広く意見を吸い上げ、将来像をまとめられました。地域を4つのブロックに分け、元ブラショピングとグルメのまち、生活感覚あふれた元町ライフゾーン、懐深い夜のたまり場とオフィス街、生まれかわる流通・倉庫街、とする案です。同案は平成8年7月、「みなと元町タウンオアシス構想」として、自ら笹山・神戸市長に提出されています。

大きな被害を受けた栄町通では、両側に立地する企業に声をかけ、再整備のための青写真をつくるべく、栄町周辺まちづくり懇談会を発足されました。歩道拡幅のうえ、街灯も設置されることになり関会長は自ら委員長になって、平成9年8月に栄町通街灯設置基金運営委員会を設立、105社から300万円を超える寄金を集め神戸市へ贈呈されたことは、協議会として画期的な出来事であり、平成10年7月、新築時の細則などを定める栄町通景観形成市民協定発効への大きな弾みともなりました。

地域の西の玄関口ハーバーロードでは、栄町通から元町商店街までの地域に展開するホテルシェレナが震災で大きな被害を受け、廃墟に

なっていました。別用途の建物が新築される場合に備え、関会長は地元沿道各社をまとめ平成12年10月、もともちハーバー懇談会を設立、ここでも建築時の規則を定める景観形成市民協定を発効されました。ホテル跡地には学生寮やマンションが新築され、懇談会が関係することによって円滑なまちづくりが行われたのも記憶に新しいところです。

こうした活動により平成11年11月17日、協議会は「地域活動を通じて、心のふれあうまちづくりに励む」団体として、笹山・神戸市長から「地域活動賞」を贈られました。

平成14年6月7日、退任にあたり関会長は「まちづくりはデスクの上だけではなしえないもの、年月をかけ前進後退を重ねながら構築されていくもの」と話されました。私はいまその遺志をつぎ、住民主体のまちづくりで、微力ながら地域の発展に貢献できればと心を新たにしているところです。合掌

弔辞にかえて 会長 奈良山喬一

三町・夢街道 ㊦

書店の話(15)

吉岡宝文館(2)

岩田照彦

安永年間にはじめて吉岡家の書店は、経営が着実で、その伝統は受け継がれ明治に至っている。六代目平助もその方針をうけつぎ、店員の指導と訓練に意を用いた。平助はまず店則八か条を定め、勤務状況を調べ賞罰を明らかにした。従業員のやる気を引きだすためのルールを、早々と取り入れたようだ。毎年十一月を決算期として、毎期の実績を検討、次年度の計画をたてるという組織的経営法を導入、家運の進展につとめた。

六代目の平助が、家運進展の口火を切ったのは、神戸に支店を開いたのを機に、教科書取り扱いの世界に手をひろげたことだろう。すべての児童が小学校へ入学する時代ではないが、まとまった量の書籍を販売できる唯一の商品だったろう。

明治十九(一八八六)年公布の小学校令は、小学校の教科書は文部大臣検定のもに限り、と定めていた。検定教科書のはじまりである。企業は、競って多種多様な教科書を発行した。が、批判の聲が多かった。不備な内容、悪い紙質、高価格という世間の評だ。明治二十九(一八九六)年、貴族院は「小学校修身科の教育は国家に大きな影響を有するものでその教科に必要な図書は、国費で完全なものを編纂し、その教育に欠点なきものを」と要望、三十四(一九〇一)

年には衆議院が「現行小学校用図書審査会制度を廃止し、小学校教科書は国費で編纂を」と建議する。

議会の要望を現実のものにしたのは明治三十五(一九〇二)年十二月に発売した教科書審査員と、教科書採択を巡って発生した汚職事件だった。全国人の知事、学校長、視学官、教員など二百人余の容疑者が挙げられ、教育界空前の不祥事に発展する。明治三十六(一九〇三)年、文部大臣菊池大麓は、教科書の国定化を決意、同年四月、小学校令に「小学校の教科用図書は文部省に於て著作権を有するものたるべし」と規定した。

こうした動きに六代目平助は、大阪で出版業を習得した大場久吉を東京へ送り込み、出張所を開設する。政治問題に発展したとはいえず、教科書の発行に時間の余裕はない。東京での活動が実り、宝文館は明治三十六年、文部大臣兒玉源太郎から小学校教科書の修身、国語、習字、歴史、地理など、あわせて百十三万冊の翻刻発行権を、翌三十七(一九〇四)年には久保田文部大臣から尋常小学校算術、図画、高等小学校用算術、図画、合せて十三万冊余の翻刻発行権を取得する。

明治三十七年、兵庫県下の国定教科書特約販売店として、熊谷・吉岡の両書店が、文部省編纂の物を出版し、検査のうえ、県下に配布した。

が、教科書発行専門の書店ということではない。次回、教育関連の書物も含め、手元の資料から明らかに becoming 出版書籍についても触れておこう。

神戸元町商店街 楽市楽座 情報 9月

◇元町1番街商店街振興組合 Tel.331-7850

元町占い市 9月12日(水)12時～17時

元町1番街水曜市 9月19日(水)10時～19時

◇風月堂ホール(有料) Tel.321-5555

もとまち密着「趣雅亭」

9月10日(月)

桂 二乗 林家 卯三郎 桂 米左

笑福亭 仁福 林家 染二 桂 文太

前売券は8月11日より風月堂で発売

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) Tel.361-4523

9月7日(金)～9月11日(火)

劉素真と神戸墨酔会 水墨画展(水墨画)

9月13日(木)～9月18日(火)

2018神戸写真展 写真展(写真)

9月20日(木)～9月25日(火)

第36回 木製帆船模型作品展(木製帆船模型)

9月27日(木)～10月2日(火)

第16回スケッチクラブ「サンツリー」展(水彩)

栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は8月10日(金)

10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(神戸市住宅都市局)田中淳也、(兵庫県信用組合)古門佑樹・岩田彩希・大西弘・田中祥平、(トマト銀行)ト部知子、(㈱神明)岡田隆寛、(神明倉庫)藤尾憲弘・米澤彩香、(大一産業)有末正人、(三鈴マシナリー)野田常美、(㈱イーエスプランニング)水野靖之、(佐野運輸)北島幸宏・末松明、(新光明飾)中川俊・篠原博明・大森貴美子、(佐田野不動産)佐田野宏之以上、18名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



編集後記

地元まちづくり団体を中心に、兵庫県や神戸市の協力もあって「喜楽館」がにぎにぎしく新開地に開業した。元町では、神戸風月堂を拠点とする「恋雅亭」が四八丁目で活動するNPOあり、あいネット神戸は、その事務所を劇場に仕立てて「神戸街角サロン」と銘打ち、兵庫素人落語芸術協会の協力で「うさぎ寄席」を開いている。素人とは言いが、友人はだしの出演者も多い。次回の開催は九月十六日(日)午後二時に開演する。入場料は、御茶代の五百円ぽつぷり。お申し込みは、NPOあいあいネット神戸(〇七八ー三八〇ー三三〇二)まで。

海という名の本屋が消えた (58)

平野義昌

鈴木商店 その2

鈴木商店焼打ち事件は1918(大正7)年8月12日。ちょうど100年前のこと。

新聞が寺内内閣を攻撃し、実力者・後藤新平と繋がる鈴木を悪役にする。誤報も曲解もあった。鈴木側は新聞社に記事取り消しを求めた程度。大番頭・金子直吉は、「鈴木は悪いことなんぞしていない。いつか、きつとわかるんじゃ」と弁解をしなかった。^{註1}

事実、鈴木は米を買い占めていない。それどころか外米を輸入し、安売りで提供している。買い損ねた米穀商が鈴木売り惜しみと非難した。「大阪朝日新聞」は鈴木が小麦市場で儲けたことを米買占めにすり替え、さらに敵国ドイツに米を送っているとフェイクニュースを流す。買い占めていたのは仲買人であり、輸出していたのは大手商社だった。他紙と比較して、「大阪朝日」の鈴木攻撃は尋常ではない。

〈……毎日(毎日新聞、引用者註)に於て、鈴木は米不足緩和のために登場して来た「某間屋」に過ぎなかったが、朝日に於て、鈴木はあくまで後藤―鈴木―鈴木であり、それが動くなら、手ぐすねひいて待ち構えられている「例の鈴木商店」であった。／毎日では、鈴木商店を問題にすることもあったが、朝日では鈴木商店だから問題にした。〉^{註1}

作家・玉岡かおるは『お家さん』(主人公は鈴木よね)でこう書いている。庶民の識字率が上がり、彼らは情報を求めている。「大阪朝日」はフランス製の輪転機を導入して大量印刷可能で、15(大正4)年から発行された夕刊も普及し、新聞は刷れば売れた。

〈……大阪朝日が大正デモクラシーの旗手として、庶民の側に立ち、国家や権力に対してものを言う、という姿勢を貫いたことによるものでしょ。幹部記者には鳥居素川はん、長谷川如是閑はんなど、自由主義的な言論人が座り、河上肇はんなどの客員も名を連ね、存分に筆をふるっておいででしたさけえ。〉^{註2}

対する後藤は雑誌で、国家のため働く主張し、「大阪朝日」を国賊と罵倒した。玉岡は「活字戦争」状態だったと言う。「大阪朝日」も大手商社の買占めを知っていたはずだが、まず後藤つぶし、そのために鈴木を槍玉に挙げた。

鈴木支配人・西川は鈴木への脅威を日々感じ取る。社会主義者らしい記者がやって来て、世間の攻撃から守ってやろうと恐喝まがいの要求をする。いわゆる左翼ゴロだが、彼の弁舌に「危険な感染力」を感じる。新聞各紙は群衆が米屋に殺到する様子を伝え、投書欄に米を買えない人の怒りや恨みが溢れた。そして、「市民大会を開こう」の貼り紙が記事になった。西川が金子に貧困対策に義捐金を提案する。金子は、金より働き口を用意するのが実業家の仕事で政治家の使命、寄付は偽善、寄付するなら人知れずやる、と拒否。金子に私欲は

ない。丁稚から叩き上げた金子は何よりも「主家安泰」、事業拡張と事業による社会貢献しか考えていない。金子は、何も悪いことはしていない、の一点張りで、西川の危機感が伝わらない。

〈問題は、疚しいとか疚しくないとかいうことではなくなっている。民衆が追いつめられ、捌け口を求めているということ、それが鈴木に向って殺到して来そうだという現実。理由はどうあろうと、鈴木が悪者に仕立てられ、目標にされているという現実。そこからどう逃れるか――それが問題なのだ。市民生活の困窮ぶりは、たしかに眼に余った。〉^{註1}

鈴木が外米の安売りを始めて3日目の11日。伝票の手違いから米が販売所に届かなかった。「大阪朝日」は「責任は鈴木商店」と批判。金子は兵庫県知事に呼び出され、そこで10万円の寄付を申し出た。

12日、西川は寄付の手続きを取った。翌日の新聞で報道されるだろうと、一安心した。この日、騒動を暗示するような事件があった。三菱造船所で賃上げ問題から職工が暴動を起こしていた。先の社会主義記者が再び西川を訪ねて来たが、西川は金を渡して帰らせた。金子は船鉄交換交渉のため夜行列車で上京し、西川は接待で料亭に出かけた。社内には宿直の社員3名のみ。「大阪朝日」夕刊はまたも内閣と鈴木攻撃。群衆は湊川遊園地から鈴木本店はじめ市内あちこちに向っていた。^{註1}

〈本隊は「鈴木をほうむれ、鈴木をほうむれ」と叫びながら相生橋を渡り、東川崎町一丁目の鈴木商店に殺到した。／ときに午後八時二十分。正面入り口には、相生橋署の巡査十数人が提灯をふりかざして警戒していたため、群衆ははじめは店を遠まきにして、罵声をあびせるだけだった。ところが、時間がたつにしたがつて、いきりたった群衆の中から石を投げるものが出た。こうなると、もう手につけられない。数十人が、制止する巡査を突きつけて店内へ乱入した。〉^{註3}

別の集団が花隈から元町商店街に入ってきた。〈群衆は「米を安せえというのんじゃ」と喚声を上げながら殺到してきた。もちろん表戸はしめていたが、次々とウインドーが壊されていく。ガラスが割れる音、扉を破る音……。焼き打ちされるかもしれないと聞いていたので、生きた心地はしなかった」と、元町の古老たちは口をそろえる。〉^{註3}

群衆は暴徒化し、栄町通4丁目の鈴木旧本宅を襲った。家屋に乱入し家財道具を運び出し、火をつけた。建物にも火を放とうとする者がいたが、リーダーらしい男が止めた。栄町・元町は焼けずにすんだ。

鈴木本店に話を戻す。身軽な男が雨樋伝いに窓から侵入し、入り口を開き群衆を入れ、火が放たれた。〈消防隊は四方から駆けつけて来たが、一滴の水も筒先から出すことは出来なかった。／消火栓には抜刀した男がさえぎって寄りつくことは出来なかった。〉^{註4}

消火栓につながったホースも切られてしまう。警官たちは神戸新聞社に逃げ込んだ。新聞社

から放水したところ、水をかけられた暴徒が新聞社に火をかけた。〈見物する数万の群衆は、自分が直接その暴動に参加しなくとも、暴徒と同じように快なる哉と叫んでいるのだから、この見物人たちも精神的参加といえよう……。〉^{註4}

城山三郎は放火した人物にも直接取材をしている。事件当時は20代前半の旋盤工だったという人が詳細に話す。近所に住んでいた老侠客と共に青年たちが鈴木本店に行く。建物の裏に回り、通用門を乗り越えた。なかなか火がつかず、近くの油屋で蠟マッチを買い、それでたちまち燃えあがった。建物内には別のグループがいて、大鏡を丸太で壊していた。城山になぜ鈴木を狙ったのかを問われ、「鈴木が買占めとと聞いてた」「朝日新聞が、やれやれと言うとつたらしい」などと証言。事件後、仲間と逃亡したが、逮捕され懲役刑を受けた人もいる。「こぎつけて言うなら、『みんな、ついて来い!』いう間違った英雄気分ですな」「未知なやつばかりが、任意、火いつけたわけです」。^{註1}

油屋から石油缶を持ち出したという証言もある。複数の人間が放火した。

城山は、若者の暴発はその暴発を求める民衆がいたからだと言う。そこまで民衆を突き動かしたものは何か、と追究する。〈一鈴木商店が、天下の不満を一身に引き受けた形となった。焼打ちを知って、西川ははじめ鈴木商店の社員たちが駆けつけた。／だが、夜空を焦がさんばかりの炎、十重二十重に囲んで喊声をあげる群衆相手には、手の出しようもない。裏口から飛びこんで、書類の一部を運び出すのが精一杯であった(重要書類は金庫に納めてあり、消失を免れた)。／群衆が兵神館に向って引揚げはじめたのは、十一時過ぎであった。やがて、兵神館が焼かれたとの報せが来、神戸精米所などの米屋も襲われた。〉^{註1}

夜中に、鈴木系列の神戸製鋼倉庫が襲撃され焼かれた。同じく日本樟脳会社も放火され全焼した。翌13日、兵庫県知事は姫路第十師団に出勤を要請。兵士と群衆がぶつかり、死者が出たが、襲撃騒動は落ち着く。

西川は鈴木信用回復を第一に考える。

註1 城山三郎『鼠 鈴木商店焼打ち事件』 文春文庫 1975年
註2 玉岡かおる『お家さん』(上・下) 新潮文庫 2010年
註3 『神戸新聞地物語』 のじぎく文庫 1973年
註4 武田芳一『黒い米』 のじぎく文庫 1963年



焼打ち直後の鈴木商店本店 『神戸新聞地物語』より

出来事ファイル (No.18-9)

■猛暑のなかで元町夜市

7月24日午後6時～9時まで、28回目となる「元町夜市」が、1～6丁目までの元町商店街の全丁を舞台に開かれた。1番街では鉄道模型などが当たるあみだくじ、三丁目は恒例のこうべ小中学校生による和太鼓が特設ステージで、4丁目はロックンロールショー、5丁目はビンゴゲームとマジックパラダイスで人を集め、6丁目は留学生によるアジアフードなど。猛暑のなか、たくさんの人で賑わった。



■花時計の移転先にいかが

先月、神戸が大好きな北長狹通りに住む佐藤正展さんから事務局へ手紙がきた。神戸市役所2号館の建て替えにともない、長年、神戸の顔として親しまれてきた花時計が転居の運命にあると知り、その転居先にきらら広場はいかがですか、という提案である。佐藤さん製作の、きらら広場にほめ込まれた花時計の写真を見ると、サイズからみて受入可能なスペースはありそうだ。



きらら広場へ移転時の花時計合成写真(佐藤正展さん提供)

■元町の芸術家たち展ひらく

元町からルネッサンスの風をおくろうと7月5日(木)～10日(火)まで、神戸まちづくり会館地下ギャラリーで恒例の「元町の芸術家たち展」が開かれた。出展したのは、元町商店街やその周辺で活躍している方々で絵画や書、焼物など多彩な作品群が展示され、ルネッサンスの風に親しもうと多くの人が訪れた。主催者は先月、15年にわたる同展の作品集を刊行している。



■自転車マナーアップキャンペーン

7月19日(木)午後2時45分から生田・葺合・水上3警察署の主催で「自転車マナーアップ街灯キャンペーン」が元町商店街6丁目～1番街までを会場に行われた。参加したのは葺合高校・神戸龍谷高校・松蔭高校・夙川学院高校・親和女子高校の生徒に中央区役所。通行人に啓発チラシを配布しながら、自転車交通ルールの遵守、マナーの向上を、行き交う人たちに呼び掛けた。



■元兵庫県令・神田孝平の足跡 語り継ぐ

元町通の名称を定めた兵庫県令の神田孝平は岐阜県垂井町の出身。江戸幕府の蕃書調所教授をつとめ維新後は新政府に出仕、地租改正原案作成のほか、数学、考古学、天文学、文学など幅広い分野で活躍した。同氏の没後120年にあわせ、生誕地の垂井町で、文化財保護協会など関係団体が主催し、地元まちづくりセンターで神田研究の第一人者・長崎大の南森茂太准教授を迎え講演会を開いた。



神田孝平の顕彰碑に献花する顕彰会参加者(岐阜新聞より)

■お知らせ

人事

旧居留地連絡協議会 7月2日付

会長 松岡辰彦

前会長 野澤太一郎は顧問に就任

住所変更

神戸市経済観光局

観光MICE部観光企画課

移転前:〒650-8570

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

神戸市役所1号館7階

移転後:〒651-0087

神戸市中央区御幸通6丁目1番12号

三宮ビル東館9階

電話・Fax番号は移転後も変更ありません。
移転先での業務開始日は7月23日(月)

■みなと元町タウン協議会・懇親会おわる
平成二十九年度総会

六月一日(金)、協議会は午後三時三十分からまちづくり会館三階ホールで平成二十九年度総会を開いた。出席者二十二名、委任状三十六名、合計五十八名で総会は成立、奈良山会長の挨拶で始まり事業報告、収支決算報告、監査報告、事業計画、収支報告に加え、第五号議案として根津コンサルタントから、まちなみ委員会と協議中の「元町商店街沿道の土地利用、建物用途に関する基本的な考え方」について報告を受け、終了した。

同日午後六時からエスタシオン・デ・神戸で懇親会を開催。奈良山会長は冒頭、阪神淡路大震災後、協議会対象地域人口が二千七百人から六千六百人台へ、所帯数も千三百から四千四百所帯にと三倍になった所帯数が人口を五倍に押し上げている状況を報告、暮らしの魅力、安心への備え、楽しい街への魅力アップに取り組むと挨拶、懇親会に。

その後、竹村英樹(兵庫県産業労働部産業振興局長)、林泰三(神戸市住宅都市局計画部長)のあいさつに続き宮本一郎(神戸市中央区長)の音頭で乾杯、懇談会に。その後、神戸市から参加していた中山徹(危機管理室担当課長)、天野稔也(観光局地域環境課長)、古泉泰彦(経済観光局経済部商業流通課長)、福永一郎(建設局中部建設事務所副所長)、増谷佳幸(みなと総局振興部振興課客船誘致担当課長)、栗岡由樹(消防局中央消防署長)、村瀬明久(交通局営業課長)氏らから現状報告のほか、菅沢崇(産経新聞社神戸総局長)、浅見昭彦(日本経済新聞社執行役員神戸支社長)両氏からもお話を頂き午後八時、沢口涼祐(南京町商店街振興組合役員)の中締め挨拶で懇親会を終えた。



総会で、沿道の土地建物用途について語る根津コンサルタント